

2016年12月4日 主日礼拝説教(要旨)

聖書 ルカによる福音書 17章 20～21節

説教 「神の国はどこに」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

「神の国はいつ来るのか」とファリサイ派の人たちは主イエスに尋ねました。いつ来るのかとは、裏返して言えば、まだ来ていないではないかということです。あなたが宣べ伝えている神の国は一体いつ来るのか、どこに来ているのかということです。ファリサイ派の人たちの質問なので、彼らがまた主イエスを試そうとしているのかと勘繰りたくなりますが、これは真面目な問いだと考えてよいようです。彼らは真剣に神の国を待ち望む人たちでした。彼らは、ギリシア・ローマ文化に押し流されていく時代の中で、この世に妥協せず、先祖伝来の信仰と生活を忠実に守り抜こうとしていた人たちでした。彼らの問いは切実なものでした。「主よ、いつまでなのですか」「いつまであなたはご自分の民をみじめなままに放置されているのですか」と訴えているのです。

したがって、この問いは私たちもときに尋ねてみたくなる種類のものかもしれません。世の中はどんどんおかしな方向へ進み、いよいよ暗闇が地を覆っているからです。いったい神の国はいつどこに来るのでしょうか、神のみこころはどこにあらわされているのでしょうか、と。

こうした問いに対して、主イエスが答えて言われたのは、「神の国は見える形では来ない」と言うことです。見える形というのは「観察」という言葉です。天文学者が星の動きをじっと観察し、医者が患者の病状を診察するようなニュアンスの言葉です。ファリサイ派の人たちは、当時のユダヤ社会の中で、特別な使命感をもって神の国の現れを観察していました。神の救いの約束が実現する兆候を絶対に見逃すまいとしていました。

けれども主イエスは、あなたがたが見たいと願っているような仕方で、神の国が来るのではない、と言われます。実際、ファリサイ派の人々は、神の国を自分の信仰の目で見出そうとしていましたが、主イエスが権威ある御言葉を語り、力ある愛の御業を行って、主イエスのもとに徴税人や罪人たちが集まってきたとき、そこに神のご支配を受けとめることはできませんでした。主イエスにおいて来ている神の国を見過ごしにしていたのです。

私たちが何かを科学的、客観的に観察する場合、そこでは対象と適当な距離を置いて、中立的に関わることが大切でしょう。しかし、ファリサイ派の人たちが主イエスにおいて来ている神の国を見逃したのは、実はそうした観察態度のゆえであったのではないのでしょうか。誰よりも神の知識を持っていると自負しながら、神の救いにあずかっている人たちのことを距離をおいて観察するような仕方で見ていたのではないのでしょうか。自分たちも神の憐れみと赦しなしには生きていけない罪人であることを忘れていたのではないのでしょうか。それゆえに、彼らは鋭い観察眼を持ちながら、主イエスにおいて起

こっている神の愛の御業を認めることができなかつたのです。私たちもただ神の御業の評論家になっているならば、神の国に生きることはできません。

ついで主イエスは、「実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ」と言われました。文語訳聖書は、「視よ、神の国は汝らの中にあるなり」と訳し、口語訳聖書は「神の国は、実にあなたがたのただ中にあるのだ」と訳しました。「中に」としたほうが力強くおさまりがよいような感じがします。けれども、中という場合、うっかりすると神の国が人間の心の中の問題で、内面的精神的なものだと誤解してしまう恐れがあります。主イエスの始められた神の国を心情的に捕えてしまうのです。そのような解釈は主イエスの言われたことは違います。あなたがたのところにある、と言われるのです。しかも、これは主イエスを受け入れている人たちに向けてではなく、主イエスの教えと働きを認めないファリサイ派の人たちに対して語られているのです。なぜなら、主イエスがそこにおられ、主イエスが十字架に向かって歩み始めておられるからです。

ファリサイ派の人たちは主イエスの働きに神の国のはじまりを見ることができないでいました。では弟子たちは正しく見ていたのでしょうか。そうではなかったと言わざるをえません。彼らも主イエスの苦難と十字架を前にしてつまずいたのでした。主イエスの十字架がゴルゴタの丘に立てられたとき、ここに神の国が来たと思った人は誰もいなかったのです。しかし、人間の願いや予想をはるかに超えて、人の思いを全く覆して、神の御子イエスは神のご支配を打ち立てられました。御子の十字架の死と復活によって、私たちは罪赦され、新しく生かされました。そのような仕方でも神のご支配が確立されたのです。私たちは主イエス・キリストによる神の愛のご支配の中におかれています。「実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ」とは、このような神の愛に、私たちがすでに招かれているという宣言なのです。

後に、復活された主イエスが天に帰って行かれる時、弟子たちは「主よ、イスラエルのために国を立て直してくださるのは、この時ですか」と尋ねました。しかし、主イエスはその時については答えられず、「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受け」「地の果てに至るまで、わたしの証人となる」と言われました（使徒言行録1：8）。この世界の現実がいかに暗く、神に逆らう力がいかに強くても、私たちが御言葉に従って生きているところに神の国は現されていきます。主イエス・キリストによって召し集められた教会は、この世の批評家の観察によれば愚かで欠け多い集団で、社会統計的には無視される他ない小さな存在かもしれません。しかし私たちは、主イエス・キリストによって神の国が確かに来ていることを、宣教と奉仕と交わりによって証ししていくのです。